石井勲の漢字教室

別巻 母と子の実践教室

1 子どもはみな神童

1 子どもはみな神童

石井 勲





(1) 幼少期の学習が決め手

――珠算や囲碁でも証明ずみ

日本珠算連盟主催の、数年前の段位検定試験で、六歳の幼稚園児が除暗算（暗算でする割り算のこと）で、最高位の〝十段位〟をかち取って、話題になったことがありました。

十段位とは、「六桁数（十万位までである数）を、二～四桁数で割る」という割り算を六十題、三分間以内で解き、そのうち五十六問以上を正解した者が初めて獲得できる、という大変な段位です。

例えば690,237÷813というような割り算を、回答欄に答を書き入れる時間を含め、一問あたりわずかに三秒間で解いていく、というのですから、私どもにはとても信じがたいことです。正に〝神わざ〟としか言いようがありません。私など、その十倍の時間を与えられても、六十問中どれだけ正答できることでしょう。

さて、最近、このような天才的幼児が、いろいろの方面で驚嘆すべき能力を発揮している実例がよく紹介されるようになりました。それらはいずれも、「天才」とか「神童」とかという言葉で表現され

ていますが、そこで披露される才能は、決して「天性による才能」ではありません。いずれも「幼少期における学習の成果」である、と断定できるものばかりです。

〝幼児の能力開発〟で世界的に有名なグレン・ドーマン博士は、「エスキモー人は寒さに強いが、それは決して生れつきではない。乳幼児期から寒さに慣らされた当然の結果に過ぎない。また、アメリカインディアンや蒙古人が騎馬に巧みなのも、やはり生れつきではなくて、幼少期から騎馬の習慣があるためである」ということを現地で、原住民と生活を共にする中でこれを確認しています。

かつては、成人してから始めるのが普通であった囲碁の世界でも児童期からこれを始めることによって棋界に君臨した木谷実、呉清源氏らの活躍により、「児童期から始めないと一流にはなれない」というように、考え方が変りました。それが今では、棋界の長老である高川名誉本因坊の言によりますと、「三歳の幼児は十分に囲碁が理解できるばかりではなく、三歳から囲碁を始めた者の才能は、それ以後から始めた者の才能に比べて、異質とも言えるほどの差異がある」と言われるほどに、幼児期の学習効果の高いことが評価されるようになりました。

冒頭に紹介しました〝神わざ〟とも言うべき珠算能力も、幼少期に学習を始め、しかも幼少期のうちにあそこまで到達できるだけの練習をしたから達成したのであって、幼少期を過ぎてから学習をしたのでは、とてもああはいかなかっただろうと思われます。

このように考えてきますと、子どもは〝だれでも神童〟なのだ、と言わざるを得なくなります。ドーマン博士は、「どんなに偉大な学者でも、幼児に比べたら、どうしようもない無能力者である」とまで言っています。

(2) 磨けばダイヤに

――大人より格段早い進歩

「子どもはだれでも神童である」と私は言いました。それに対して、「世の中に神童がいることは否定しないが、それは極めて少数である。多くは当たりまえの子どもであって、〝子どもはみな神童〟とは、言い過ぎもはなはだしい」という反論がよくありますので、さらに一言しておきます。

私が言う〝神童〟とは、宝石にたとえるなら〝ダイヤモンド〟だということです。つまり「幼児は

だれでもただの石ではなくて、ダイヤモンドである」ということです。

ただ、いかにダイヤモンドとは言え、よく磨き上げられて、初めて美しい宝石になるのであって、地中から掘り出されたままでは、決して宝石の美しさはありません。ただの石は、どんなに磨いても決して宝石にはなりませんが、ダイヤモンドなら、磨けば必ず美しい宝石になります。そこに、ダイヤモンドとただの石との違いがあります。

幼少期に適当な学習をさせるならば、子どもはだれでもすばらしい才能の持ち主になることが出来ます。だから、幼児はみなダイヤモンドであって、ただの石ではありません。これが、私が「子どもはだれでも神童である」という理由です。

「努力をすれば才能が伸びるのは、何も子どもに限ったことではない。大人だって伸びるものだ。それなのに、幼児に限るように言うのはやはりおかしい」と、今度はこんな反問が聞かれそうです。

もちろん、大人でも努力すれば、才能は伸びます。しかし、それは「ただの石でも、磨けば美しい飾り物になる」ということです。ただの石は、どんなに磨いても、決してダイヤの輝きは現われないように、大人になってからの努力では伸びる程度が知れているのです。

子どもの場合の進歩は、大人の進歩とは異質とも言うべき程の違いがあります。(1)の、珠算十段の幼児を例に考えてみましょう。690,237÷813というような大きな数の計算を、答を書き込む時間を含めて平均三秒間で解くなどという能力は、大人になってから始めたのでは絶対に獲得できるものではありません。幼児だからこそ、わずかの期間で獲得できたのだと思います。

私の友人に囲碁の好きだった男がいます。暇さえあれば、囲碁の本を手にして研究していました。早くから秀才の誉れ高く、囲碁には大学時代から熱中し、二十数年間も研鑽したので、棋院から四段の免許状を取得しました。その友人が、中学一年生の院生（棋院で修業している少年）と手合せしたところ、全く歯が立たず、以来、自信を失って研究するのがばからしくなり、ついに碁石を手にしなくなりました。

頭が良くてあれほど熱心に研究しても、幼児から始めた者に比べると、伸び方がこんなにも違うのです。「鉄は熱いうちに鍛えよ」のことわざどおり、何事にも人間には鍛えるべき時期があることに疑いをいれる余地はありません。

(3) むずかしい漢字もさりげなく
――カードを使い物語風に

15×20 センチメートルくらいの画用紙で〝森・鳩・池・蟻・猟師・鉄砲〟と書いた六枚の漢字カードを見せながら、次のようなお話をしてやります。

「ある所に森がありました。森って知っている？　木がたくさん生えている所ね。」

「この森の中に、一羽の鳩が住んでいました。鳩ぽっぽ見たことある？」

「森の中には池がありました。池って知っている？　川とどう違うかしら？」

「池のそばに蟻が住んでいました。蟻さんは働き者で、暑い夏の間に食べ物をたくさん集めて穴の中にしまっておきます。」

「夏の暑い日のことでした。蟻さんは働いてのどがかわきました。それで池のところへ行き、水を飲もうとして、池に落ちてしまいました。」

「それを見ていたのが鳩です。鳩は木の葉を一枚落としてやりました。蟻は木の葉に乗って助かりました。」

「次の日、森の中へ猟師がやって来ました。猟師って知っている？　鉄砲を持っていて、鳥や獣を見つけると、ズドン！　と打って殺してしまう人なの。こわい人だねえ。その猟師が森の中へやって来ました。」

「猟師は鳩を見つけると、鉄砲でねらいました。鳩は気がつきません。危い！　その時、蟻が猟師に気がつきました。蟻は走って行き、猟師の足にかみつきました。それで鳩も気がつき、逃げることが出来ました。」

「蟻が池に落ちて危かった時、鳩が蟻を助けてやりました。鳩が猟師にねらわれて危かった時、蟻が鳩を助けました。」

「鳩と蟻は仲良しですね。仲良しのお陰でどちらも助かりましたね。これでお話はおしまい。」

さて、これだけのお話をしてやり、終ったところで、漢字カードを一枚ずつ見せて、何というカードだったかを尋ねてみて下さい。たいてい、話の間に覚えてしまっていて、読めるはずです。読めない場合は、「これは……という字よ」とさらっと読んでやります。教えてやるんだという気持は無用

です。六枚終ったところで、また初めから尋ねてみて下さい。初め読めなかったカードも、今度は読めるでしょう。三歳～五歳の子どもだったら、たいてい一度で、六枚の漢字カードを覚えて、正しく読み分けるはずです。鳩も蟻も、小、中学校では学習しない、つまりむずかしい漢字です。その漢字を、子どもは無造作に覚えてちゃんと読み分けるのです。

次の日、六枚のカードを一枚ずつ読ませてみて下さい。たいてい覚えていて、正しく読み分けるはずですが、読めなかったら、「〇〇」と軽く読んでやって下さい。「忘れたの！」と責めるような態度は禁物です。これを一週間後、一月後、半年後にやってみて下さい。たいてい正しく読み分けられるはずです。この実験をやってみれば、子ども がどんなに漢字をよく覚えるかが判るはずです。

(4) 低学年ほどやすやすと

――かなより早く漢字学習を！

いかがですか。〝鳩・蟻・森・池・猟師・鉄砲〟などの漢字を幼児に教えてあげられましたか。実験してみれば、子どもがどんなにやすやすと漢字を覚えるかということが、よく御理解いただけると思います。

世の中には、うまそうに見えて食べてみるとまずい物があり、その反対に、まずそうに見えて、食べてみるとうまい物があります。だから、見かけにまどわされて、食べず嫌いになってはいけません。漢字はむずかしそうに見え、かなはやさしそうに見えます。しかし、実際に条件を同じにして教えてみますと、幼児は、鳩でも蟻でもやすやすと覚えてしまいますが、かなはなかなか覚えません。

わが国の教育界は、明治以来、この〝見かけ〟にまどわされて、小学校の一、二年生では、かなの学習を主体にして、漢字の学習は多く高学年に振り向けられました。そのため、〝学校〟という言葉でさえ、社会には実用されていない〝がっこう〟というかなで読み書きさせられて来ました。

東京都で指導主事として、小学校の教育指導に当たっていた私は、このことに疑問を抱き、一年生に、初めから〝学校〟という漢字で学習させる実験をしてみたくて、昭和二十八年、小学校の教師になりました。

以来、長年にわたる実験で、①一年生は、能力の高い子も低い子もみな〝学校〟の方が〝がっこう〟

よりも覚えやすく、読みやすいこと、②六年生は年間二百字の漢字学習にも困難を感じているが、一年生は年間六百字の学習にも困難を感じないこと、などの事実を明らかにしました。

これらの事実は、いずれも従来の教育の常識を根底から覆すもので、この事実を知った時には、私自身信じられないほどのものがありました。そこで、小学校の実験をやめて、幼児に漢字を教える実験を始めました。

この実験で明らかになったことは、①幼児の漢字を覚える能力は、小学校の五、六年生よりもずっと高いこと、②幼児は漢字を覚えることにより、知能が高く、情操が豊かに、判断力が増し、自立心が強まり、対人関係が円満になる、ということでした。

ところで、昭和三十六年まで、中学卒業までに習得すべき八百八十一字の漢字が、三十六年以降は小学校卒業までと改められ、今はその漢字が九百九十六字にふえています。このように漢字学習の重要性は年々強まっていますが、その習得状況は逆に悪化しています。

しかし、理科でも社会科でも漢字がわからなければ学習を進めることが出来ません。小学校の五、六年生から中、高校生にかけて、教科書が読めないために学習についていけない者が七割にも達し、学校嫌いを助長して、それが不良化の最大原因とされています。

これを救う道は漢字力の強化以外にありませんが、今の学校教育には残念ながらその力がありません。

(5) 就学前に一千字は楽々

――漢字カードを三年間一日一枚

前に、青少年不良化の最大原因は、学業の不振であり、その原因は漢字力が弱くて教科書が理解できないことにあると述べ、それを救う力は、残念ながら今の学校にないことを述べました。

その理由は二つあります。その第一は、国語教育の軽視です。どこの国でも、三年生くらいまでは全学習時間の半分以上を国語科に当てています。例えば、東ドイツでは、二年生の学習時間の総数が十九時間で、そのうち十二時間が国語。三年生では総数が二十四時間で、十四時間が国語です。わが国の国語の時間はこれらの半分にも達しません。こんなことで、十分な読書能力を養うことが出来る

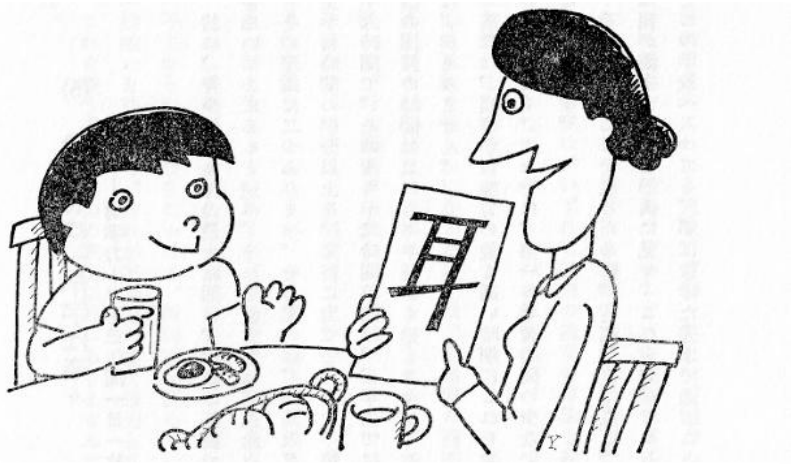
はずがありません。

第二は、漢字学習能力の最も高い時期にこれを学習させないでいて、能力が衰えてから学習させていることです。これでは、第一の学習時間の少ないことと相まって、いよいよ漢字学習がうまくいかないわけです。

そこで私はこれを救うために、「三歳から小学校に入学するまでの三年間、毎日わずかに三分間、母親が漢字カードを子供に見せ、これを読んでやるだけで、三年間に一千字の漢字を覚え、だれでも、どこの学校へ入っても、ずば抜けた秀才で通すことが出来るようになる」という方法を考え出しました。

これを実践した人はまだ少数ですが、実践した人は例外なく、ずば抜けた秀才になっています。なぜ、そんなに効果があるのかは、あとで述べることにして、明日からでもさっそく実践できるよう、まず具体的な指導法から先に述べましょう。

⑶で述べたような漢字カードを作ります。これを毎日、一日一枚のペースで学習し、三年間に約一千字の漢字を覚える、というものです。



さて、このカードを、毎食事の前後に見せ、読んでやります。

例えば、〝耳〟だとすると、「これは〝み〟という字よ。みみ。みみ」というように、二、三回くり返して読んで聞かせます。この時子供に真似て言わせてみるのはとても良いことです。この学習に要する時間は約十秒間くらい。

食事の前後にやりますから、合せて二十秒。それが一日三回ですから、総計約六十秒。これが第一日の学習のすべてです。

第二日は、まず〝耳〟のカードを見せて、「これ何という字？」と尋ねます。「みみ」と読んだら「えらい」と言ってほめ、次に第一日の要領で、〝口〟の学習に進みます。「これ何という字？」という質問は一日に六回、これを七日間続けます。これが大切です。

さて、質問のカードが毎日一枚ずつふえていきますから、第

一日の一分がやがて三分くらいまでにふえていきますが、七枚が最高でそれ以上はふえません。毎日、新しいカードがふえますが、同時に一枚へりますから。試みに、一か月間で学習するにふさわしい漢字を三十字あげ てみましょう。

耳、口、目、鼻、頭、手、足、顔、首、腕、歯、舌、指、胸、腹、猫、犬、象、馬、猿、苺、桃、栗、柿、梨、山、川、海、空、雨。

(6) 三歳から一日一字ずつ

――〝石の上にも三年〟の根気

いかがです。(5)で申し上げたことを実行して下さった方は、一日わずかに三分間程度の学習で、お子さんにも漢字が覚えられる、ということがよくおわかりいただけたと思います。それで、一か月間に三十字を三年間続けていけば、だれでも一千字の漢字が覚えられるわけも、おわかりいただけたと思います。

(4)に述べましたように、中学生でも、一千字を理解していない子どもの方が、理解している子どもよりも多い、というのが現実ですから、三歳の時からこの学習を始めますと、小学校に入学するまでの間に、平均的な中学生以上に書物が読める子どもになれるわけです。

「それは理屈であろう。いかに何でもそんなにうまく行くはずがない」、そうお考えではありませんか。確かにそうお考えになるのも無理はありません。小学校へもまだ入らないというのに中学生以上に書物が読めるなどとは、自分の目でこれを見ない限り、とても信じられるものではありません。だから、今は私も、「半信半疑で結構ですから、とにかく三年間実行してみて下さい」と言うだけに留めておきます。

昔から、「石の上にも三年」という言葉があります。何事でも、三年間続けてやるだけの意欲、つまり〝根性〟のない人間は物にならない、ということでしょう。漢字学習でもそうです。「それはぜひ必要なことだ」と考えて、それが三年間続けてやれないようでは、いかに子どもに能力の高いことを望んでも、それは無理というものです。「蛙の子は蛙」と言われていて、性格でも能力でも子は親に似るものです。事実、何年か前に行なわれた都立教育研究所の調査によりますと、「テレビをよく見る親の

子は、やはりよくテレビを見、成績の伸びも知能の割に悪い。それに反して知能の高低によらず、成績の伸びの良い子は、テレビを見る時間の量が少なく、その子の親もテレビを見る時間が少ない」ということです。この調査からみても、知能にせよ学習成績にせよ、その良い悪いは全く子どもの責任ではなくて明らかに親の責任だ、と言った方が正しいようです。

だから、わが子を能力の高い子にしたいと心から望むならば、親自身がそれに値する努力をしなければなりません。つまり、少なくとも三年間は、一日一字の漢字学習を怠るような親であってはなりません。もしも、それだけの努力が出来ないというのであれば「蛙の子は蛙」とあきらめて、わが子がどんなに悪い成績であっても、親としての至らなさを責めて、決して子供を責めてはなりません。

さて、ここでも左に一か月分の学習漢字を揚げてみます。⑸で紹介した漢字が終了したらどうぞ試してみて下さい。昔話に出て来る動物などは、⑶の〝鳩と蟻〟の要領でなさると一層有効です。

肉、卵、牛乳、お茶、お菓子、林檎、密柑、葡萄、箸、皿、茶碗、兎、亀、牛、羊、豚、鶏、鳩、鴉、雀、蟹、蜂、蟻、蛙、蝉、蝶、お爺さん、お婆さん、お母さん、お父さん。

⑺ 漢字こそ最高のプレゼント

――覚えることを楽しませる

ここでは、毎日の学習が、出来る限り効果の上がるよう進められていくために、親としてぜひ心得ておいていただきたいと思う点を、一、二述べたいと思います。

まず第一は、「この漢字学習は子どもが良い子であった場合、その褒美として行なうものである、という態度を常に堅持していてほしい」ということです。

なぜかと言いますと、学校ではつらい仕事とされている「漢字を覚えること」が、子どもにとっては〝楽しい遊び〟であり、それは〝最高の楽しみ〟と言っても決して言い過ぎではありません。だから褒美としてこれほど子どもの心を満足させるものはないのです。

金銭や物品による褒美は、次第にこれを増大していかなければ効果がなく、それは子どもの心を堕落させますが、この褒美は、与えることによって子どもの心をいよいよ高める働きを備えています。

論語に「君子は恵んで費さず」とありますが、この褒美は、いくら与えてやっても親の懐が痛むと

いうことがありません。これこそ「恵んで貰さず」というもの、理想的な褒美と言うことが出来ます。

従って、当然のこととして「子どもが悪い子であった場合は、漢字学習を行なってはならない」ということも厳守していただきます。親としては、一日一回でも休みたくないでしょう。その気持はよくわかりますが、そこが肝腎です。悪い子であるのに漢字学習を許したら漢字学習は傷がつきます。「漢字を覚えること」は、もはや〝最高の楽しみ〟ではなくなってしまいます。そうなったらもうおしまいで取り返しはつきません。

「漢字を覚えること」が楽しい遊びだからこそ幼児は漢字を覚えるのです。記憶の原理は〝関心〟と〝反復〟の二つです。楽しいからこそ〝関心〟が強く、喜んで〝反復〟するのです。褒美でなくなったら、〝関心〟は弱まり、従って〝反復〟しなくなります。

小学校の漢字教育がうまく行かないのは、記憶力が次第に低下していくこともありますが、それよりも「漢字学習を罰として課す」ことをしているからです。〝形だけ〟いかに〝反復〟練習させても、いやいやながらしているのでは決して効果は上がりません。

第二は、「漢字が正しく読めた時は、よく読めた、偉い、と言ってほめ、心から喜んでやる」ということです。親の喜ぶ顔ほど子どもを生き生きさせるものはありません。子どもがやる気を出せば効果が高まります。

だから、子どもが読めなかった場合、子どもを責めることはもちろん、がっかりしたり不満顔をしてはいけません。初めて教えてやるような態度で、おだやかに教えることが大切です。

次に参考のためもう一か月分の学習漢字を掲げてみます。

靴、靴下、鞄、傘、帽子、人形、積木、塗り絵、折り紙、絵本、風船、鈴、笛、太鼓、鉄棒、滑り台、公園、砂場、砂、石、花、草、池、汽車、電車、自動車、自転車、三輪車、飛行機、船。

(8) 母と子で漢字カード取り競争

――反復の上にも反復する

一日一字の漢字学習を始めたら、毎日、怠らずに実行して下さい。もし、一回も欠かさずに三か月も実行するなら、ほぼ九十字の漢字が読めるようになるはずです。しかし、始めて三か月ぐらいする

と脱落するお母さんがぼつぼつふえる頃なので、持続するよう心がけてください。

昔の人は「石の上にも三年」と言って、どんなに辛い仕事でも辛抱してやり通したものです。この仕事は、親と子の心を結ぶ何よりも楽しい〝遊び〟です。初めは喜ばないようでも、きっと心の奥底では望むに違いない好ましい〝遊び〟です。それが三年と辛抱できないようでは、全く〝だめな母親〟と言われても仕方がありません。まして、三か月ともたないようではお話になりません。ぜひとも自分に鞭うってがんばって下さい。

さて、(7)で、記憶の原理は、〝関心〟と〝反復〟の二つだと言いました。今の学校教育でも家庭教育でも、最もいけないと私が思っていることは、〝反復学習〟を軽視していることです。理解だけが重視され、理解できれば先へ先へと進ませたがります。だから、反復が足りず、従って能力が育たないのです。

ヴァイオリンで有名な鈴木銑一先生の鈴木メソッドが、従来の教育と最も異なる点は、この〝反復〟を重視している点です。この〝反復〟が人間の能力を育て、才能を作るのです。孔子は「学んでこれを習う、また悦ばしからずや」と言いました。学問をして理解できたところをくり返しくり返し練習していると、それが身につき、自然と自分の才能が伸びていることに気がつく。それが実に楽しい。そういう意味の言葉で、〝学習〟という言葉はそれから生れました。だから、反復練習の伴わない〝学習〟など、ほんとは〝学習〟とは言えないものです。

一日六回の反復練習を七日間続ける。つまり、一枚の漢字を四十二回読むという練習は、才能を作るためには最小限必要なもので、出来ればもっともっと練習させた方がよいのです。そこで、お奨めしたいのが、〝漢字カード取り競争〟です。一月分もしくは二月分の漢字カードを、カルタ取りのようにして取り合うのです。

お父さんもしくはお母さんが読み手になり、読んだ漢字を親子で取り合うのです。初めは手加減しなければ勝負にならないと思うでしょうが、どうしてお父さんお母さんがいくらがんばっても、とても勝てないように直ぐになります。これを三年間続けて下さい。子どもの能力は驚くほど伸び、必ず「やって良かった」と思う日が来ます。そして子どもが成人した後、振返って最も楽しい想い出として一生を楽しませてくれるのが、この〝漢字カード取り競争〟であることを予言します。

さて、もう一回だけ学習漢字を書いておきます。

虎、熊、鹿、鼠、狸、狐、河馬、駱駝、麒麟、金魚、風、雷、雲、雪、お日様、月、星、青、赤、黄色、白、黒、紅茶、砂糖、机、椅子、冷蔵庫、電話、時計、新聞。

(9) 言葉の力は偉大である

――能力は言葉の量と質に正比例

ここでは、「言葉の持つ偉大な力」についてお話してみたいと思います。

アメリカの学者が行なった実験にこういうものがあります。幼児たちに、何匹もの蝶がおさめられている標本箱の中から一匹だけ取り出してこれを観察させます。その蝶は、仮に、黄色い色をしていて縞模様があったとします。幼児たちに蝶を観察させて数時間後に、その蝶を元の標本箱に戻し、多くの蝶の中からそれを見つけさせる、という実験です。

見事に正しくこれを言い当てることが出来た子どもは、必ず〝黄色〟という言葉と〝縞〟という言葉を両方とも知っている者に限られていた、ということです。〝黄色〟と〝縞〟と、この二つの言葉のどちらかでも知らない子どもには正しく言い当てることが出来なかったのです。



それはなぜでしょうか。生きた人間である以上、だれだって〝黄色〟い色が目に入らないはずはありません。けれども、〝黄色〟という言葉を知らない者にはそれが意識されず、従って記憶に残らないのです。〝黄色〟という言葉を知っていて、初めて「この蝶は黄色いな」と思い、その色が目にとまり、それが記憶にとどまるのです。

だから、同じ経験をしても、その人の持つ言葉の量とその質の違いによって、その経験から得られる内容が違ってくるわけです。言葉を数多く、正しく、深く理解している者ほど、その経験から獲得する内容が豊富なのです。学校で、同じ時間に同じ学習をしても、必ず個人差が生ずるのも、その根本的な原因

はここにあるのです。

アメリカの人間工学研究所が以前に、四十万人もの人を対象にこのことを実験したことがあります。その結果、人間の能力はその人の持つ言葉の量と質とに正比例する、ということが証明されました。言葉を正確に、かつ豊富に理解している者ほど学校の成績が良く、また社会においても成功している、という事実があったのです。

昔から、「読み書き算盤」と言われ、それが学習の代名詞でしたが、この考えは基本的に正しかったのです。とりわけ〝読み〟の力は社会科や理科はもちろん、算数の問題を解くのにも欠かすことの出来ない最も基本的な能力です。その〝読み〟とは「言葉を数多く、正しく、深く 理解する」ことの総称です。

⑸でも書きましたが、ドイツの小学校では、三年生までの三年間は、社会科も理科も全くありません。例えば、三年生の一週間の授業時間総数は二十四時間ですが、そのうちの二十時間が「読み・書き・計算」です。残った四時間を、体育・音楽・図工に一時間二十分ずつ分け合っているのです。

（学習漢字については、別巻3の「楽しく遊ぶ漢字カード」が五百枚ありますので、本書のⅡ「漢字で遊ぼう」を参考にしながら、皆さんの創意工夫の上に、さらに漢字学習を進めてみてください）

⑽ 文字こそは〝目で見る言葉〟

――人類発展の大きな原動力

⑼では〝言葉〟の持つ偉大な力について語りましたが、ここでは〝文字〟の持つ偉大な力についてお話したいと思います。

人類がこの地球上に現われてから、何十万年になるかわかりませんが、恐らく人間はその初めから〝言葉〟を持っていたと思います。その言葉によって、人間は自分の一生の間に獲得した知恵を次の世代に伝えることが出来、そのため知恵が蓄積されて高い文明を築くことが出来たのです。

チンパンジーなどは幼児期にはむしろ人間の幼児よりも賢いくらいの動物ですが、言葉を持たないために知恵を伝えることが出来ないので、その生活に少しも進歩というものがありません。現在のチンパンジーの生活は恐らく百万年前の生活と同じ程度であるに違いありません。

それほど〝言葉〟はすばらしいものですが、発するや否や消えてしまうという欠点があります。そのため正しく受け取ることが困難であり、その上、言葉の伝えられる範囲は極めて近いところに限られています。

その〝言葉〟をそのままに蓄えることが出来て、いつ、どこで、だれでも受け取ることが出来たらどんなにすばらしいことでしょう。人類は言葉を使いながら、常にそうありたいと念願していたに違いありません。そうして遂にその念願を果たしました。それが、〝文字〟だったのです。

〝言葉〟が耳で聞くものであるのに対して、〝文字〟は「目で見る言葉」です。耳で聞く言葉は、心にわずかなすきが生じただけでも、正しく受け取ることを妨げます。その上わずかな一部分を受け取りそこなっただけでも、全体の理解を不可能にし、また誤解を生ずる恐れがあります。しかも発せられるや否や消えてしまうので、あとからこれを確認することが出来ません。

ところが、「目で見る言葉」の文字は、正しく理解できるまで何回でもくり返して読むことが出来ます。つまり、理解できるまで消えないで待っていてくれる、という利点があります。その上、文字で書かれたものは、いつ、どこで、だれでも読むことが出来る、という利点があるのです。

人類が今日の文明を築き得たのは確かに〝言葉〟のお陰ですが、しかし〝言葉だけの時代〟の進歩はまことに遅々としたものでした。それに比べると、〝文字〟を使うようになってから、人類の発展は実に目覚ましいものがあります。それは、〝文字〟の力が〝言葉〟の力よりもずっと偉大であることの良い証拠だと思います。

それは次の点にもよく現われています。世界にはたくさんの国がありますが、文字を理解する国民の多い国ほど文化が高く、その反対の国ほど文化が低い、ということです。これらの理由は一体どこにあるのでしょうか。皆さんも考えてみていただきたいと思います。

(11) 伝達力では漢字が最高

――音声よりも十倍速い

耳で聞く〝言葉〟は、いくつもの音声の時間的な配列で成り立っていますから、一定の間を置いて次々に発声される音声を待って受け取らなければならないので、どうしてもかなりの時間を必要とし

ます。

ところが、目で見る言葉である〝文字〟は、いくつものものを同時にまとめて読み取ることが出来ますから、耳で聞く場合には数秒間かかる言葉でも、文字だと一秒すらもかからないで読み取ることが出来ます。

だから、ラジオで耳から聞く場合には十分間もかかるようなニュースが新聞により目で読む場合には、一分間とかからないで読み取ることが出来るわけです。つまり、文字を使えば言葉に比べて、比較にならぬほどわずかな時間で、多くの情報を受け取ることが出来るのです。

その上、前項に述べましたように、内容を正しく受け取ることの確実性という点でも、文字は言葉よりずっと優れているのですから、文字時代になってからの人類の発展が著しいことも、また文字を理解する国民の多い国ほど文化が高いということも当然のことだとご理解いただけると思います。

さて、その〝文字〟にも、世界にはいろいろな種類があります。わが国で使われているものだけでも、漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字と、四種類の文字があります。これらの文字は、それぞれの効用の上でどのような特徴を持っていて、日本語を書き表わす文字として、この中のどれが最も優れているでしょうか。

実はわが国で初めて高速道路が作られた時、道路標示に用いる文字としてどの文字を使うかということで実験を行なったことがあったのです。その実験によりますと、ローマ字で書かれたものは読み取るのに一・五秒かかりますが、かなだとその半分の〇・七秒で読み取れ、漢字だとさらにその十分の一以下の〇・〇六秒で読み取れる、ということがわかりました。それで高速道路には漢字が使われることに決まったのです。

同じ文字でもその種類によってこんなにも違いがあるのです。これからの生活はいよいよ多くの情報を必要とし、短時間に多くの文書を読むことが最も重要な仕事になるでしょう。その時、最も偉力を発揮する文字は漢字です。その漢字を最も良く身につけている日本人が、現在の国際競争で最も優れた実績を挙げているのは、当然のことといえましょう。漢字を発明したのは中国人ですが、その漢字を最も良く、最も多く活用しているのは日本人です。とはいえ、決して満足すべき状態にあるとはいえません。

幸い、わが国の学校教育は、世界でも最も普及しており、しかも進んでいます。漢字の重要性を認

識し、その教育法を改善すれば、国民のだれもが高い漢字力を身につけることが出来るはずです。

(12) 文字学習の否定の背景
――くずれた〝成熟優位説〟

「就学前には文字教育はすべきではない」世界中の学者たちが長い間、こぞってそう言い続けてきました。その理由は、狼少女の研究で、世界的にその名を知られた、アメリカの心理学者アーノルド・ゲゼルの学説「成熟優位説」にあるのです。

ゲゼルは次のような実験を試みました。鶏の卵からかえったひよこは直ぐにえさをついばみ始めますが、初めはなかなかえさに、くちばしが正確に届きません。およそ一週間ほどたって、やっとうまくついばめるようになる、ということを観察して確かめました。

次に、卵からかえったひよこに一週間口の中に直接えさを注ぎ込んでやり、ついばむことを全くさせないで育て、一週間たって初めてついばむことをさせました。すると、最初の日はまるで卵からかえったばかりのひよこのように、うまくついばめませんでしたが、翌日にはもう見事についばめるようになった、というのです。

「普通なら一週間もかかる練習の成果を、わずか一日の練習で成功させた理由は、一体何であろうか」と考えたゲゼルは、その理由を〝ひよこの成長〟にあるのだと考えました。そこで「早い時期からあわてて、学習するよりも、成熟するのを待ってゆっくり始めた方が効率が良い」という仮説を立て、ゲゼルはそれを人間の子どもにも実験してみました。それは、積木遊びや階段登りという、まことに簡単な実験ではありましたが、その結果は、やはり「成長を待ってゆっくり始めた方が良い」という結論を裏づけるものになりました。

この結論は、当然のように文字の学習にも推し及ばされて「就学前に苦労させて文字を学習させるよりも、成長を待ってゆっくりと始めた方が、労少なくして効果が大きい」ということになったわけです。

さてこのゲゼルの弟子にマグロウという学者がいます。マグロウはゲゼルの成熟優位説をもっと多くの点で確認を得たいと考え、双子の誕生を機会に、次のような実験を自分の子どもに試みました。

まず双子の一人に、まだ十分に歩けないうちから、毎日一定時間、ローラースケートを足に着け、滑る練習を始めました。他方の一人には、十分に歩けるようになるのを待って、初めてローラースケートの練習を始めました。

もちろん、マグロウは後者が前者の半分以下の練習で滑れるようになることを予想していました。ところが、実際はその逆になったのです。つまりローラースケートの練習には未熟なうちから早く始めた方が、成熟を待って始めるよりも成功するのです。

こうして、ゲゼルの弟子のマグロウによって、成熟優位説は皮肉にも崩れ出しました。実は文字学習にも成熟優位説は通用しないのです。その事実と理由については次に述べます。

(13) 知っておきたい学習のポイント

――言葉と同時に学ばせよう

「ゲゼルの成熟優位説はあらゆる学習に適用できる」と世界中の教育者たちがそう考えていましたが、マグロウの実験で、それが適用できないばかりか、全く正反対の結果になる場合もあることが、今や事実として現われたのです。では、この相反する事実をどう説明したら納得ができるでしょうか。

それは次のように考えたら納得できると思います。人間は、横になった状態が安定した状態であって、立つことは大層不安定な状態です。だから立っているためには、多くの筋肉を絶えず微妙に働かせてうまく重心を取るようにしなければなりません。私たちは子どもの時からそのための訓練をして、それに十分に習熟してしまっていますから、そのための苦労を全く感じませんが、ほんとは〝立っていること〟は大変な仕事なのです。

だから、まだうまく歩けない子どもにとっては、歩くこともローラースケートで滑ることも、倒れないために筋肉をうまく操る〝同じ学習〟だということが出来ます。したがって歩くことが、そのままスケートで滑る練習に直接役立ち、またスケートで滑ることが、歩くことの練習になるのです。

ところが、十分に歩けるようになってしまってから初めてスケートを練習する子どもにとっては、滑ることが歩くこととは全く別の〝新しい学習〟になってしまいます。つまり、歩くことが滑ることに直接役立つ、ということがありません。

また、まだよく歩けない子どもは、倒れることに苦痛を感じませんから、滑る練習で倒れてもそれを少しも苦痛に感じません。しかし、十分によく歩けるようになった子どもが滑る練習で倒れることは苦痛になります。

このように考えてきますと「まだよく歩けないうちから滑る練習をすると成功し、十分に歩けるようになってから滑る練習を始めると成功しにくい」という理由がよく納得できると思います。

すでに⑽のところで述べましたように、漢字は「目で見る言葉」です。漢字と言葉との違いはただそれが「目から入ってくるか、耳から入ってくるか」だけの違いであって、中身は同じものです。しかも、漢字でも言葉でも最終的に受け取るところ、判断するところは、全く〝同じ〟大脳です。

これもすでに述べたところですが「目で漢字を受け取る方が耳で言葉を受け取るよりも本質的にやさしい」ことなのです。だから幼児のうちに言葉と漢字とを同時に学習させるなら、それは滑ることと歩くこととを同時に学習するのと同じ理由で、両者の学習が互いに助け合ってうまくいくのです。

言葉を学び終えてから漢字を学ばせる今の教育は、十分に歩けるようになってから滑ることを学ばせるようなもので、これでは漢字学習が大変なものになるのが当然です。漢字がむずかしいのではなく、むずかしくなるように学ばせているのです。

⑿ 目と耳による同時学習の効用

――「漢字で学習」に理解度高まる

これまでのお話で、今まで長いこと「小学校就学前から文字教育を始めることはいけない」と考えられていた理由や、また「そういう考え方は今は全く誤りであることが証明されている」という事情が、よくおわかりいただけたと思います。

昭和五十八年現在で、私の提唱する幼児期の漢字教育の必要性をよく理解し賛同されて、漢字教育を実践して下さっている幼稚園が全国にはおよそ四百園ほどあります。北は北海道から南は沖縄にまで及んでいて、その数は年ごとに増加する一方ですが、それはもちろん、以上に述べたような理由や事情が次第に教育者の間に理解され浸透していったからですが、実はそのほかに次に述べるような理由があるからです。

人間は外界の事物を五官を通して取り入れ、これを知識として大脳に蓄えています。ところがアメリカのある学者の実験調査によりますと、五官の中でも視覚による知識が圧倒的に多くて、全体量の実に八十三％に及んでいる、ということです。次が聴覚による知識でこれが十一％。ですから他の三つの器官によるものは合計しても六％にしかなりません。

また、「百聞は一見に如（し）かず」と言われているように、同じ内容の事柄を耳だけで学習したのと、目だけで学習したのと比較してみま すと、目で学習したものの方が確実で忘れにくい、ということもこのアメリカの学者の実験調査でわかりました。

さらにおもしろいことには、目と耳と両方の器官を同時に使って学習すると、耳だけの学習効果を一とした場合、目だけの学習効果がその二倍であるのに対して、目と耳との同時学習は何と六・五倍の学習効果がある、とその効果を測定していることです。

いま、普通の幼稚園では、「手を洗う」という生活指導の場合、これを子どもの耳に訴えて指導しているだけですが、これを黒板に「手を洗う」と書き、これを子どもの目に訴えながら、同時に耳からも訴えてやりますと、耳だけの学習に比べて、子どもの理解吸収の度合いが比較にならないほど高まるのです。

だから「漢字教育をするようになってからは、子どもたちの理解度が驚くほど良くなり、とても指導しやすくなった」と、どの実践幼稚園でも口をそろえて言明していますが、それは子どもたちが目と耳との二つの器官を同時に働かしていることの当然の結果だと思います(先のア メリカの学者の言う通りだとすれば、六倍半の学習効果が得られるのですから……)。

ともあれ、このように、漢字教育を始めますと、たちまちのうちに、実にはっきりとした違いが子どもたちの上に現われて来るものですから、一度この教育に足を踏み入れた幼稚園は、決してこの教育を棄てることをしないのです。そういうわけで、年ごとに漢字教育の実践幼稚園が増加しているのです。

(15) 目で見る漢字は言葉より覚えやすい

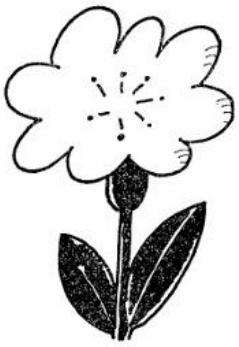
――漢字学習で脳障害児に抜群の効果が

(11)のところで、言葉というものはいろいろな音声によって組み立てられていて、それが一定の順序に、一定の間隔で発音されるのを、一音一音その通りに受け入れて初めてそれと理解できるのですから、言葉を受け取るということは想像以上にむずかしいものがある、ということを指摘しました。

しかし、それ以前の問題である「言葉そのものを覚えること」がそれ以上にむずかしいものであることを、私たちは知っておく必要があります。

ひどい脳障害による重度の精薄児には、言葉の覚えられない子どもがいます。ひどい精薄児だから言葉が覚えられないというよりも、言葉が覚えられないのでひどい精薄児になったと言うべきでしょうが……。

脳障害児にとっては音声の特徴や違いを聞き分けることが出来ず、それで言葉が覚えられないのだと思われます。言葉が覚えられないと、(9)のところで述べたように「物を見ても、それを表わす言葉を持たないとそれを認識することが出来ない」ので、知能が育たず、そのため精薄児になった、と考えられるからです。





それは「ひどい脳障害のために言葉の覚えられない子どもでも、目で見る言葉―漢字―は覚えることが出来る」という事実(それは石井教育研究所の脳障害児教育によって初めて明らかにされました)があります。脳障害児が漢字を覚えて「漢字を読む学習」(と言ってもまだ言葉を知らないのですから、発音できるわけがありません。漢字を見て、その漢字の表わす内容を頭の中に思い浮かべ、例えば花という漢字カードを見せて実際の花を指さすようにさせる学習)をくり返してやっていると、頭を使うことによって頭の働きが良くなるためでしょう。言葉が言えるようになって、漢字をほんとに読むようになり、知能の発達していくことが明らかに観察されました。

またこの事実から、耳で聞く言葉よりも一目で全体の意味がわかる漢字の方がずっとわかりやすく、覚えやすいものだということを、私は発見することが出来たのです。

耳で聞く言葉は発せられるや否や消えてしまうので、発せられる瞬間にこれをとらえて覚えるよりほかに仕方ありませんが、目で見る言葉―漢字―は消えませんから、つまり覚えるまで待っていてくれるわけですから、どんなにもの覚えの悪い者でも必ず覚えられるというわけです。

そこで今度は、まだ言葉の言えない赤ちゃんに漢字を教えてみることも試みました。するとやはり、同じように漢字をまず覚え、その漢字を識別するという仕事が頭の働きを発達させるために、漢字をほんとに（声を出して）読むようになったのです。

「言葉と漢字とを同時に学ばせよ」と前項で言いましたが、その裏にはこのような実験があり、そうすれば必ず、すばらしい効果のあることが明らかにされていたからです。

(16) 言葉とともに漢字を学ぶ

――一歳児が200の漢字を！

石井式漢字教育の中心的指導者の一人で、沖縄の幼稚園長をしていらっしゃった故又吉信一先生は、長男の孝旨君に、生後八か月くらいの時から漢字カードを読んで聞かせることを試みました。

そして半年ほどたった生後一歳二、三か月の頃、私が会った時には孝旨君はすでに二百枚の漢字カードを覚えていて、一枚一枚ちゃんと読み分けて見せたので、私はすっかり驚いてしまいました。

普通、幼児は、生後一年半くらいでは「ウンマ」とか「マンマ」とかというような幼児語が、三十語も言えたら立派なものだ、と一般に考えられています。私も自分の孫でこれを確かめてみましたが生後一年半の時には三十くらいの幼児語がやっと言える程度でした。

それにひきかえ、孝旨君は一歳半の時には三百字の漢字が読めるようになっていましたから、「漢字によって言葉を教えれば、普通に覚える言葉の量の十倍もの言葉が覚えられる」ということになります。

このすばらしい言語能力は幼児にただ言葉を語りかけるだけでは、決して得られるものではありません。前に述べた〝脳障害児〟の場合と同じく、目で見る言葉は覚えるまで消えずに待っていてくれるから覚えられるのであって、それが耳で聞く言葉に結びつくからです。

こうして、耳で聞く言葉と目で見る言葉である漢字とが、耳と目という二つの異なった器官を通って大脳にあるそれぞれの神経中枢に受け入れられるから、強固な記憶のネットワークが構成され、記憶が取り出しやすくなるのです。

私も孫の教育に当たっては、特に言葉の教育を重視して、一日も早く〝おじいちゃん〟と呼んでもらえるよう家族に協力を求めましたが、一歳半の時にはまだ〝おじいちゃん〟という言葉が言えるようになりませんでした。

ところが、孫が一歳半になった日を機会に、漢字を教えることを始めましたところ、一週間もたたないうちに〝おじいちゃん〟と、はっきり言えるようになりました。

この事実は、言葉と、その言葉を表わす漢字と、この二つを一緒に幼児に教えてやった方が、ただ言葉だけを教えてやるよりも、幼児にはずっと覚えやすい、ということを証明するものであると同時に、漢字を覚えてこれを読むという仕事が、大脳の働きを活発にして、他の別な能力まで引き出し、伸ばすことを証明していると思います。

すでに述べたように人間は「言葉によって物を見、かつ考える」ものですから、同じ一歳半でありながら、理解している言葉が三十語対三百語という大差があったのでは、この時期における幼児の観察力や思考力の発達に大変な差が生ずることは疑いありません。ここにぜひ注目していただきたいと思います。

(17) 〝這う〟より〝泳ぐ〟方が先

――幼いほどうまくできる

漢字は、言葉を初めて学ぶ時に一緒に学べば、たやすく覚えられるのですが、言葉を先に学んで、それから長い期間を経て漢字を学ぶと、漢字はとてもむずかしくなるのです。これが私の発見した新しい事実です。

これは、歩くことをスケートで滑ることを一緒に習えば、両方とも早く上達するのに、歩くことを先に成功させ、それから期間をおいて滑ることを習うと、スケートで滑ることが大変むずかしくなる、というマグロウの実験によく似ていて、実に興味深いものがあります。

また、これと同じようなことが水泳にもあることが、オーストラリアのチンメルマン夫妻により明らかにされました。それは、昭和四十八年の五月、アメリカのフィラデルフィアで開催された「人間能力開発国際会議」で発表されましたが、ちょうどその時、私もその会議で「漢字による幼児の能力開発」について発表することになっていましたので、夫妻の発表を直接見聞することが出来ました。

夫妻の報告によれば、「人間がこの世の中に生れ出て、一番初めに出来ることは〝這う〟ことではなくて〝泳ぐ〟ことだ」というのです。けれども普通には、赤ちゃんが一番初めに出来ることは〝這う〟ことだと、だれもがそう思って、このことに疑いを持った人はだれ一人いなかったと思います。

けれども、赤ちゃんが腕で体重を支え、その腕を使って体を進めることは、赤ちゃんとしては大変な仕事です。それに比べると、水の中では赤ちゃんはひとりでに上向きに浮くことが出来、手を軽く動かすだけで体を進めることが出来ます。しかも、生れるまでは、胎内でずっと水（羊水）の中につかっていて、言わば〝泳いで〟いたのですから、その感触の残っている生後まもない時期ほど、〝泳ぐ〟ことが容易に出来るわけだというのです。

ところが、生後まもない時期だと容易に出来るこの〝泳ぐ〟ことが、成長するにつれて次第にむずかしいものに変っていくのです。幼い時だったら少しの練習でうまく泳げるようになりますが、成人してからではどんなに練習しても泳げるようにならないことが、決して少なくありません。

もう一つ、ついでに言いますと、音感教育がそうです。音感教育が幼い時ほどわずかの練習で成功することを、幼児の音感教育で有名な木下達也先生が指摘していらっしゃいます。「四歳から音感教育を始めた幼児は、三歳から始めた幼児の二倍の練習を必要とする。しかし、二歳から始めれば、三歳から始めた幼児の半分の練習で済む」と。

ローラースケート、水泳、音感教育、これらはいずれも早期に教育を始めれば成功し、遅く始めると労多くして功少なしと言えるものです。成長を待ってゆっくり始めた方が良いものと、このように早く始めた方が良いものとあることを知る必要があります。

(18) 〝くり返し〟こそ学習の基本

――反復練習が養う高い能力

鈴木メソッドで世界的に有名な鈴木鎮一先生が、以前「その原理は母国語教育の応用である」とおっしゃっていました。

その母国語教育の応用とは、「母国語の学習が、単に母国語の習得だけでなく、母国語を〝習得する能力〟をも養っていることにある」ことを指摘しており、具体的には〝くり返し〟の重要性が指摘されています。そのことについて鈴木先生が「これは大事だから、一万回やって来なさい」ということをいとも無造作におっしゃっていたのが印象的です。今の教育に欠けているのは、実にこの〝くり返し〟です。だから、(7)で私はこのことを強調し、「反復練習の伴わない学習など、ほんとは学習とは言えない」と述べたのです。「わかった。もう結構」と言って次へ進むことばかり重んずる現代の教育では、もの知りは作れても、能力の高い人間を作ることは出来ません。

幼稚園の漢字教育に反対する人たちがよく口にする言葉に、「就学前に漢字を学んだ子どもは、小学校へ進んで〝そんなことはもう知っている〟と言って漢字学習をばかにするからいけない」ということがあります。

しかし「知っていてよく出来るからおもしろくない」と言うような子どもは、むしろ少数です。そんなことを言う子は概して知能が低く、努力する意欲も乏しい、従って進歩が期待できない子どもです。つまり、「知っているからばかにする」ばかりでなく、「知らなければなおのことやる気をなくしてしまう」子どもです。

子どもというものは、柔軟でかつ強靭な精神を持っていますから、大人と違い、本来〝くり返し〟を非常に好むものです。同じ話を何べん聞いても、決して飽きることがなく、それどころか、「またお話して」と進んで求めるのが子どもの特性であり、本性です。大人の目からみたら馬鹿らしいことに夢中になって、くり返しくり返し続けている姿を御覧になったことがきっとあるはずです。

世界的に著名な数学者である広中平祐先生が文化勲章を受賞された時のテレビのインタビューで、「先生は小学生の頃から算数が得意だったそうですが、そんなにお出来になったのでは、学校の勉強がさぞ退屈だったのでは……」と質問されると、言下に「とんでもない」と否定され、「出来るから

1　子どもはみな神童

最も楽しかった」とおっしゃいました。

「能力を養う」のは〝くり返し〟であり、それ以外に方法はありません。この〝くり返し〟が喜んで出来るのが幼少期の子どもです。子どもはだれでも〝くり返し〟が好きなのです。ところがそれを見て大人がばかにするものだから、子どももそれをばかにするようになるのです。大人が、それを見て「偉い」と言ってほめてやったら、決してばかにする子どもにはなりません。